ごんごろ鐘

新美南吉

青空文庫

三月八日

お父さんが、夕方村会からかえって来て、こうおっしゃった。

「ごんごろ鐘を献納することにきまったよ。」

お母さんはじめ、うちじゅうのものがびっくりした。が、僕はあまり驚かなかった。僕たちの学校の門や鉄柵も、もうとっくに献納したのだから、尼寺のごんごろ鐘だって、お国のために献納したっていいのだと思っていた。でも小さかった時からあの鐘に朝晩したしんで来たことを思えば、ちょっとさびしい気もする。

お母さんが、

「まあ、よく庵主さんがご承知なさったね。」

とおっしゃった。

「ん、はじめのうちは、村の御先祖たちの信仰のこもったものだからとか、ご本山のお許しがなければとかいって、ぐずついていたけれど、けっきょく気まえよく献納することになったよ。庵主だって日本人に変わりはないわけさ。」

ところで、このごんごろ鐘を献納するとなると、僕はだいぶん書きとめておかねばならないことがあるのだ。

第一、ごんごろ鐘という名前の由来だ。樽屋の木之助爺さんの話では、この鐘をつくった鐘師がひどいぜんそく持ちで、しょっちゅうのどをごろごろいわせていたので、それが鐘にもうつって、この鐘を叩くと、ごオんのあとに、ごろごろという音がかすかに続く、それで誰いうとなく、ごんごろ鐘と呼ぶようになったのだそうだ。しかしこの話はどうも怪しい、と僕は思う。人間のぜんそくが鐘にうつるというところが変だ。それなら、人間の腸チブスが鐘にうつるということもあるはずだし、人間のジフテリヤが鐘にうつるということもあるはずである。それじゃ鐘の病院も建たなければならないことになる。

僕と松男君はいつだったか、ろんよりしょうこ、ごんごろ鐘がはたしてごんごろごろと鳴るかどうか試しにいったことがある。静かなときを僕たちは選んでいった。鐘楼の下にあじさいが咲きさかっている真昼どきだった。松男君が腕によりをかけて、あざやかに一つごオん、とついた。そして二人は耳をすましてきいていたが、余韻がわあんわあんと波のようにくりかえしながら消えていったばかりで、ぜんそく持ちの痰のような音はぜんぜんしなかった。そこで僕たちは、この鐘の健康状態はすこぶるよろしい、と診断したのだった。

また紋次郎君とこのお婆さんの話によると、この鐘を鋳た人が、三河の国のごんごろうという鐘師だったので、そう呼ばれるようになったんだそうだ。鐘のどこかに、その鐘師の名が彫りつけてあるそうな、と婆さんはいった。これは木之助爺さんの話よりよほどほんとうらしい。

しかし僕は、大学にいっている僕の兄さんの話が、いちばん信じられるのだ。兄さんはこういった。「それはきっと、ごんごん鳴るので、はじめに誰かがごんごん鐘といったのさ。ごんごん鐘ごんごん鐘といっているうちに、誰かが言いちがえてごんごろ鐘といっちまったんだ。するとごんごろ鐘の方がごんごん鐘よりごろがいいので、とうとうごんごろ鐘になったのさ。」

僕は小さかったときには、ごんごろ鐘をずいぶん大きいものと思っていた。しかし国民六年にもうじきなろうという現在では、それ

ほど大きいとは思わない。直径が約七十糎だから周囲は70cm×3.14＝219.8cmというわけだ。お父さんが奈良で見て来た鐘というのは、直径が二米ぐらいあったそうだから、そんなのにくらべれば、ごんごろ鐘は鐘の赤ん坊にすぎない。

　しかし僕たち村のものにとっては、いつまでも忘れられない鐘だ。なぜなら、尼寺の庭の鐘楼の下は、村のこどものたまりばだからだ。僕たちが学校にあがらないじぶんは、毎日そこで遊んだのだ。学校にあがってからでも学校がひけたあとでは、たいていそこにあつまるのだ。夕方、庵主さんが、もう鐘をついてもいいとおっしゃるのをまっていて、僕らは撞木を奪いあってついたのだ。またごんごろ鐘は、僕たちの杉の実でっぽうや、草の実でっぽうのたまをどれだけうけて、そのたびにかすかな澄んだ音で僕達の耳をたのしませてくれたか知れない。

　おもえば、ごんごろ鐘についてのおもいでは、数かぎりがない。

三月二十二日

春休み第二日の今日、ごんごろ鐘がいよいよ「出征」することになった。

　兎にたんぽぽをやっていると、用吉君が、今おろすところだよ、といって来たので、遅れちゃたいへんと、桑畑の中の近道を走っていった。四郎五郎さんの藪の横までかけて来ると、まだ三百米ほど走ったばかりなのに、あつくなって来たので、上衣をぬいでしまった。

　尼寺へ来て見て、僕はびっくりした。まるでお祭りのときのような人出である。いや、お祭りのとき以上かも知れない。お祭りには若い者や子供はたくさん出て来るが、こんなに老人までがおおぜい出て来はしないのだ。杖にすがった爺さん、あごが地につくくらい背がまがって、ちょうど七面鳥のようなかっこうの婆さん、自分では歩かれないので、息子の背におわれて来た老人もあった。こういう人たちも、みなごんごろ鐘と、目に見えない糸で結ばれているのだ。僕はいまさら、この大きくもない鐘が、じつにたくさんの人の生活につながっていることに驚かされた。

　老人たちは、ごんごろ鐘に別れを惜しんでいた。「とうとう、ごんごろ鐘さまも行ってしまうだかや。」といっている爺さんもあった。なんまみだぶ、なんまみだぶといいながら、ごんごろ鐘を拝んでいる婆さんもあった。

　鐘をおろすまえに、青年団長の吉彦さんが、とてもよいことを思いついてくれた。長年お友だちであった鐘ともいよいよお別れだから、子供たちに思うぞんぶんつかせよう、というのであった。これをきいて僕たち村の子供は、わっと歓呼の声をあげた。みなつきたいものばかりなので、吉彦さんはみんなを鐘楼の下に一列励行させた。そして一人ずつ石段をあがってつくのだが、一人のつく数は三つにきめられた。お菓子の配給のときのことをおもい出して、僕はおかしかった。だが、ごんごろ鐘を最後に三つずつ鳴らさせてもらうこの「配給」は、お菓子の配給以上にみんなに満足をあたえた。

　最後に吉彦さんがじぶんで、大きく大きく撞木を振って、がオオんん、とついた。わんわんわん、と長く余韻がつづいた。すると吉彦さんが、

「西の谷も東の谷も、北の谷も南の谷も鳴るぞや。ほれ、あそこの

村も、あそこの村も、鳴るぞや。」

と、謎のようなことをいった。

「ほんとだ、ほんとだ。」

と、樽屋の木之助爺さんと、ほか二、三人の老人があいづちをうった。

ぼくは何のことやらわけが分からなかったので、あとでお父さんにきいて見たら、お父さんはこう説明してくれた。

「ごんごろ鐘ができたのは、わたしのお祖父さんの若かったじぶんで、わたしもまだ生まれていなかった昔のことだが、その頃は村の人達はみなお金というものを少ししか持っていなかったので、村中がその僅かずつのお金を出しあっても、まだ鐘を一つつくるには足りなかった。そこで西や東や南や北の谷に住んでいる人たちやら、もっと遠くのあっちこっちの村まで合力してもらいにいったんだそうだ。合力というのは、たすけてもらうことなのさ。そうしてようやくできあがった鐘だから、四方の谷の人や向こうの村々の人の心もこもっているわけだ。だからごんごろ鐘をつくと、その谷や村の音もまじっているように聞こえるのだよ。」

ごんごろ鐘をおろすのは、庭師の安さんが、大きい庭石を動かすときに使う丸太や滑車を使ってやった。若い人達が手伝った。馴れないことだからだいぶん時間がかかった。

ごんごろ鐘はひとまず鐘楼の下に新筵をしいて、そこにおろされた。いつも下からばかり見ていた鐘が、こうして横から見られるようになると、何か別のもののような変な感じがした。緑青がいっぱいついている上に、頂の方には埃がつもっているので、かなりきたなかった。庵主さんと、よく尼寺の世話をするお竹婆さんとが、縄をまるめてごしごしと洗った。

すると今まではっきりしなかった鐘の銘も、だいぶんはっきりして来た。吉彦さんがちょっと読んで見て、

「こりゃ、お経だな。」

といった。それからまた、

「安永何とか書いてあるぜ。こりゃ安永年間にできたもんだ。」

といった。すると、どもりの勘太爺さんが、

「そ、そうだ。う、う、おれの親父が、う、う、生まれたとしにできた、げな。お、お、親父は安永の、う、う、うまれだ。」

と、かみつくようにいった。

紋次郎君とこの婆さんが、

「三河のごんごろという鐘師がつくったと書いてねえかん。」

ときいた。

「そんなことは書いてねえ、助九郎という名が書いてある。」

と、吉彦さんが答えると、婆さんは何かぶつくさいってひっこんだ。

和太郎さんが牛車をひいて来たとき、きゅうに庵主さんが、鐘供養をしたいといい出した。大人たちは、あまり時間がないし、もうみんなじゅうぶん別れを惜しんだのだから、鐘供養はしなくてもいいだろう、といった。しかし若い尼さんは、眼鏡をかけた顔に真剣な表情をうかべて、「いいえ、自分の体を熔かして、爆弾となってしまう鐘ですから、どうしても供養をしてやりとうございます。」といった。

大人たちは、やれやれ、といった顔つきをした。みんな、庵主さんがしようのない頑固者であることを知っていたからだ。しかし庵主さんのいうことも道理であった。

鐘供養というのは、どんなことをするのかと思っていたら、ごんごろ鐘の前に線香を立てて庵主さんがお経をあげることであった。庵主さんは、よそゆきの茶色のけさを着て、鐘のまえに立つと、手にもっている小さい鉦をちーんとたたいて、お経を読みはじめた。はじめはみんな黙ってきいていたが、少したいくつになったので、お経を知っている大人達は、庵主さんといっしょに唱え出した。何だか空気がしめっぽくなった。まるでお葬いのような気がした。年寄りたちはみなしわくちゃの手を合わせた。

鐘供養がすんで、庭師の安さんたちが、またごんごろ鐘を吊りあげると、その下へ和太郎さんが牛車をひきこんで、うまいぐあいに、牛車の上にのせた。その時、黄色い蝶が一つごんごろ鐘をめぐって、土塀の外へ消えていった。

和太郎さんが牛を車につけているとき、みんなはまたいろいろなことをいった。

「この鐘がなしになると、これから報恩講のときなんかに、人を集めるのに困るわなア。」

といったのは、いつも真面目なことしか言わない種さんだ。

「なあに、学校生徒を呼んで来て、ラッパを吹かせりゃええてや。トテチテタアをきいたら、みんな、ほれ報恩講がはじまると思って出かけりゃええ。」

と答えたのは、ひょっとこづらをして見せることの上手な松さん。

「ほんな馬鹿な。ラッパで爺さん婆さんを集めるなどと、ほんな馬鹿な。」

と、種さんはしかたがないように笑った。

「これでごんごろ鐘もきっと爆弾になるずらが、あんがい、四郎五郎さんとこの正男さんの手から敵の軍艦にぶちこまれることになるかもしれんな。」

と吉彦さんがいった。四郎五郎さんの家の正男さんは、海の荒鷲の一人で、いま南の空に活躍していらっしゃるのだ。

「うん、そうよなあ。だが、正男の奴も、ごんごろ鐘でできた爆弾たあ知るめえ。爆弾はものをいわねえでの才。」

と無口でがんじょうな四郎五郎さんは、煙草をすいながらぽつりぽつり答えた。

「だが、これだけの鐘なら爆弾が三つはできるだろうな。」

と、誰かがいった。

「そうよなあ、十はできるだら。」

と誰かが答えた。

「いや三つぐれえのもんだら。」

と、はじめの人がいった。

「いいや、十はできるな。」

と、あとの人が主張した。僕はきいていておかしくなった。爆弾にも五十キロのもあれば五百キロのもあるというように、いろいろあることを、この人たちは知らないらしい。しかし僕にも五十キロの爆弾ならいくつできるか、五百キロのならいくつできるか、ということはわからなかった。

いよいよごんごろ鐘は出発した。老人達は、また仏の御名を唱えながら、鐘にむかって合掌した。

鐘には吉彦さんがひとりついて、町の国民学校の校庭までゆくことになっていた。そこには、近くの村々からあつめられた屑鉄の山があるということだった。

ぼくたち村の子供は、見送るつもりでしばらく鐘のうしろについていった。来さん坂もすぎたが、誰一人帰ろうとしなかった。小松山のそばまで来たが、まだ誰も帰るようすを見せなかった。帰るどころか、みんなの顔には、町まで送ってゆこう、という決意があらわれていた。

しかし僕たちは小さい子供はつれてゆくわけにはいかなかった。そこで松男君の提案で、新四年以下の者はしんたのむねから村へ帰り、新五年以上の者が、町までついてゆくことにきまった。

しんたのむねで、十五人ばかりの小さい者がうしろに残った。ところが、そこでちょっとした争いが起こった。新四年だから、帰らねばならないはずの比良夫君が、帰ろうとしなかったからだ。五年以上の者が、帰れ帰れ、というと、比良夫君はいうのだった。

「俺あ、今四年だけれど、一年のときいっぺんすべっとる（落第している）で、年は五年とおんなじだ。」

なるほど、それも一つのりくつである。しかし五年以上の者は、そんなりくつは通させなかった。とうとう腕ずくで解決をつけることになった。

松男君が比良夫君に引っ組んだ。そして足掛けで倒そうとしたが、比良夫君は相撲の選手だから、逆に腰をひねって松男君を投げ出してしまった。

こんどは用吉君が、得意の手で相手の首をしめにかかったが、反対に自分の首をしめつけられ、ゆでだこのようになってしまった。

そんなことをしている間に、鐘をのせた牛車はもうしんたのむねをおりてしまっていた。五年以上の者は、気がせいてたまらなかった。ぐずぐずしていると、ついに鐘にいってしまわれるおそれがあった。そこで、比良夫君のことなんかほっといて、みんな鐘めがけて走った。総勢十五人ほどであった。鐘に追いついてみると、ちゃんと比良夫君がうしろについて来ていた。みんなは少しいまいましく思ったが、考えてみると、それだけ比良夫君の熱心がつよいことになるわけだから、みんなは比良夫君を許してやることにした。

川の堤に出たとき、紋次郎君が猫柳の枝を折って来て鐘にささげた。ささげたといっても、鐘のそばにおいただけである。すると、みんなは、われもわれもと、猫柳をはじめ、桃や、松や、たんぽぽや、れんげそうや、なかにはペンペン草までとって来て鐘にささげた。鐘はそれらの花や葉でうずまってしまった。

こうして僕たちは村でただひとつのごんごろ鐘を送っていった。

三月二十三日

ひるまえ、南道班子供常会をするために尼寺へいった。

いつも常会をひらくまえに、境内をみんなで掃除することになっているのだが、きょうは僕はひとつみんなの気のつかないところをしてやろうと、御堂の裏へまわって、藪と御堂の間のしめった落ち葉をはいた。裏へまわっていいことをしたと思った。それは僕の好きな白椿が咲いているのを見つけたからだ。

何というよい花だろう。白い花べんがふかぶかとかさなりあい、花べんの影がべつの花べんにうつって、ちょっとクリーム色に見える。神さまも、この花をつつむには、特別上等の澄んだやわらかな春光をつかっていらっしゃるとしか思えない。そのうえ、またこの木の葉がすばらしい。一枚一枚名工がのみで彫ってつけたような、厚い固い感じで、黒と見えるほどの濃緑色は、エナメルをぬ

ったようにつややかで、陽のあたる方の葉は眼に痛いくらい光を反射するのだ。

じつにすばらしい花が日本にはあるものだ。いつかお父さんが、日本ほど自然の美にめぐまれている国はないとおっしゃったが、ほんとうにそうだと思う。

掃除が終わって、いよいよ第二十回常会を開こうとしていると、きこりのような男の人が、顔の長い、耳の大きい爺さんを乳母車にのせて、尼寺の境内にはいって来た。

きけばその爺さんは深谷の人で、ごんごろ鐘がこんど献納されるときいて、お別れに来たのだそうだ。乳母車をおして来たのは爺さんの息子さんだった。

深谷というのは僕たちの村から、三粁ほど南の山の中にある小さな谷で、僕たちは秋きのこをとりに行って、のどがかわくと、水を貰いに立ち寄るから、よく知っているが、家が四軒あるきりだ。電燈がないので、今でも夜はランプをともすのだ。その近所には今でも狐や狸がいるそうで、冬の夜など、人が便所にゆくため戸外に出るときには、戸をあけるまえに、まず丸太をうちあわせたり、柱を竹でたたいたりして、戸口に来ている狐や狸を追うのだそうだ。

お爺さんは、ごんごろ鐘の出征の日を、一日まちがえてしまって、ついにごんごろ鐘にお別れが出来なかったことを、たいそう残念がり、口を大きくあけたまま、鐘のなくなった鐘楼の方を見ていた。

「きのう、お別れだといって、あげん子供たちが、ごんごん鳴らしたが、わからなかっただかね。」

と庵主さんも気の毒そうにいうと、

「ああ、この頃は耳の聞こえる日と聞こえぬ日があってのオ。きんのは朝から耳ん中で蠅が一匹ぶんぶんいってやがって、いっこう聞こえんだった。」

と、お爺さんは答えるのだった。

お爺さんは息子さんに、町までつれていって鐘に一目あわせてくれ、と頼んだが、息子さんは、仕事をしなきゃならないからもうごめんだ、といって、お爺さんののった乳母車をおして、門を出ていった。

僕たちは、しばらく、塀の外をきゆろきゆろと鳴ってゆく乳母車の音をきいていた。僕はお爺さんの心を思いやって、深く同情せずにはいられなかった。

それから僕たちの常会がはじまった。するとまっさきに松男君が、

「僕に一つ新しい提案がある。」

といった。みんなは何だろうかと思った。

「それは、今のお爺さんを町までつれていって、ごんごろ鐘にあわしてあげることだ。」

みんなは黙ってしまった。なるほどそれは、誰もが胸の中でおもっていたことだ。いいことには違いない。しかしみんなは、昨日、町まで行って来たばかりであった。また今日も、同じ道を通って同じところに行って来るというのは面白いことではない。

しかし、

「賛成。」

と、紋次郎君がしばらくしていった。

「僕も賛成。」

と勇気をふるって僕がいった。すると、あとのものもみな賛成してしまった。

「本日の常会、これで終わりッ。」

と松男君が叫んで、たあッと門の外へ走り出した。みんなそのあとにつづいた。

亀池の下でお爺さんの乳母車に追いついた。僕たちはお爺さんの息子さんにわけを話して、お爺さんをこちらへ受けとった。お爺さんは子供のように喜んで、長い顔をいっそう長くして、あは、あは、と笑った。僕たちもいっしょに笑い出してしまった。

何も心配する必要はなかった。昨日通ったばかりの道でも、少しも退屈ではなかった。心に誠意をもって善い行いをする時には、僕らはなんど同じことをしても退屈するものではない、とわかった。それにお爺さんがいろいろ面白い話をしてくれた。

ただ一つ困ったことは、乳母車のどこかが悪くなっていて、押していると右へ右へとまがっていってしまうことだった。だから押す者は、十米ぐらいすすむたびに、乳母車のむきをかえねばならなかった。僕たちはこのやっかいな乳母車をかわりばんこに押していったのである。

正午じぶんに、僕たちは町の国民学校についた。昨日のところになつかしいごんごろ鐘はあった。

「やあ、あるなア、あるなア。」

と、お爺さんは鐘が見えたときいった。そして、触りたいからそばへ乳母車をよせてくれ、といった。僕たちは、お爺さんのいうとおりにした。

お爺さんは乳母車から手をさしのべて、なつかしそうにごんごろ鐘を撫でていた。

僕たちは弁当を持っていなかったので腹ぺこになって、村に二時頃帰って来た。それから深谷までお爺さんを届けにいってくるのは楽な仕事ではなかった。が、感心なことに誰もいやな顔をしなかった。僕らはびっこをひきひき深谷までゆき、お爺さんをかえして来た。

夕御飯のとき、きょうのことを話したら、お父さんが、それはよいことをした、とおっしゃった。

「ん、そういえば、あのごんごろ鐘は深谷のあたりでつくられたのだ。いまでもあの辺りに鐘鋳谷という名の残っている小さい谷があるが、そこで、鋳たということだ。その頃の若いもんたちは、三日三晩、たたらという大きなふいごを足で踏んで、銅をとかす火をおこしたもんだそうだ。」

それでは、あのお爺さんもまたごんごろ鐘と深いつながりがあったわけだ。

僕は又してもおもい出した、吉彦さんが鐘をつくとき言った言葉を――「西の谷も東の谷も、北の谷も南の谷も鳴るぞ。ほれ、あそこの村もここの村も鳴るぞ。」

ちょうどそのとき、ラジオのニュースで、きょうも我が荒鷲が敵の〇〇飛行場を猛爆して多大の戦果を収めたことを報じた。

僕の眼には、爆撃機の腹から、ばらばらと落ちてゆく黒い爆弾のすがたがうつった。

「ごんごろ鐘もあの爆弾になるんだねえ。あの古ぼけた鐘が、むくりむくりとした、ぴかぴかひかった、新しい爆弾になるんだね。」

と僕がいうと、休暇で帰って来ている兄さんが、

「うん、そうだ。何でもそうだよ。古いものはむくりむくりと新しいものに生まれかわって、はじめて活動するのだ。」

といった。兄さんはいつもむつかしいことをいうので、たいてい僕にはよくわからないのだが、この言葉は半分ぐらいはわかるような気がした。古いものは新しいものに生まれかわって、はじめて役立つということに違いない。

青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館第十五巻　ごんぎつね・夕鶴」講談社
1986（昭和61）年4月18日第1刷発行
1993（平成5）年2月25日第13刷発行
入力：田浦亜矢子
校正：もりみつじゅんじ
1999年10月25日公開
2009年1月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ごんごろ鐘

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/